

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名 (学籍番号)	: 馬場住子 (7129505)
学位の種類	: 博士 (教育学)
学位記番号	: 第3号
学位授与の要件	: 大阪総合保育大学学位規程第12条
学位授与の日付	: 平成27年3月15日
学位論文題目	: フレーベル『母の歌と愛撫の歌』楽譜版の分析及び考察—乳幼児教育教材としての今日的意義を求めて—
論文審査委員	: 主査 山崎高哉 (大阪総合保育大学教授・博士 (教育学)) 副査 弘田陽介 (大阪総合保育大学専任講師・博士 (教育学)) 副査 玉置哲淳 (大阪総合保育大学教授・博士 (教育学))

〔1〕論文の概要

本論文は、幼稚園の創始者として名高いフレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) の晩年の著作『母の歌と愛撫の歌』 (Mutter - und Koselieder, 1844) の初版にコール (Robert Kohl, 1813-1889) によって付けられた楽譜版を詳細に分析・考察するとともに、フレーベルの乳幼児教育の思想と方法が集約され、詩と絵と歌が一体となっている「遊び歌絵本」が現代日本の乳幼児の教育教材として活用できるか、その可能性を探ろうとしたものである。本論文は、「まえがき—本研究のテーマ」と7章から成る本論と「あとがき」から構成され、346頁(1頁=40字×30行)に及ぶ力作である。

「まえがき—本研究のテーマ」において、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を、彼の乳幼児教育思想と方法の最も重要な部分が示された書であると総括し、「教育の書」であると同時に「遊びの書」である『母の歌と愛撫の歌』には、乳幼児の生活場面に即した日々の具体的な教育方法が示され、感覚を通しての教育、なかでも歌を伴う遊びが乳幼児期に最もふさわしい教育方法として重視されていると指摘している。それゆえ、論者は「遊び歌絵本」の教育的意義を理論的に考究するとともに、その乳幼児の教育教材としての活用可能性を保育・教育実践を通して探ることを本研究の目的としている。

「第1章 先行研究と問題の所在」で、論者は、特にフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を論じた先行研究の傾向を検討するとともに、その検討に基づいた自らの研究の立場と具体的な方法について述べている。すなわち、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の先行研究には、①その教育思想と内容の今日的意義に関する研究、②その教育方法学的研究、③その音楽教育学的研究、④その実践的研究などがあるが、これらの中で、最も研究がなされてい

ないのは③と④であり、なかでも音楽教育学からのアプローチが質量ともに希薄であるという。それゆえ、論者は、楽譜付き『母の歌と愛撫の歌』がその後なぜ楽譜を削除されて流布することになったかについて考察するとともに、初版がドイツ、アメリカ、日本でどのように受容・変容されたのか、コールの原曲版を初め、8版の楽譜一曲一曲の比較研究によって改めて原曲版の意義を明らかにし、全楽曲の分析と考察を行っている。さらに、論者は、④についても、日本の先行研究では1例しかないので、それよりも年齢の幅を広げ、対象人数、実践期間、実践する曲を増やして実践研究を行い、その実践結果に基づき、楽譜付き『母の歌と愛撫の歌』の今日的意義を明らかにしようとしている。

第2章「フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』に関する理論的考察」では、論者は、第1節において彼の教育思想とその教育目的・教育目標について、第2節においては『母の歌と愛撫の歌』の各歌における教育目標と教育方法について論じている。

言うまでもなく、フレーベルは主著『人間の教育(Die Menschenerziehung, 1826)』において、「教育目的」について「教育は、人間が、自分自身に関して、また自己自身において、自己を明確に認識し、自然と和し、神とひとつになるように、人間を導くべきであり、またそうでなければならない。それゆえ、教育は、人間をして、自分自身および人間を認識せしめ、更に神および自然を認識せしめ、そしてかかる認識に基づいて、純粹神聖な生命を実現せしめるように、人間を高めなければならない」と述べている。ここにはフレーベル独自の人生哲学の中心をなす「生の合一(Lebenseinigung)」の思想が表明されており、生の合一とは「神と一体となり(神との合一)、自然と調和し(自然との合一)、自己の内部に統一をもち(自己との合一)、人類の部分的全体として(世界との合一)三位一体的に生きること」を意味する。したがって、教育は人間を「生の合一」に到達するように導くべきであり、これがフレーベルの教育目的である。

このような『人間の教育』における教育目的が基盤となって、教育対象を乳幼児期に絞って立てられたのが『母の歌と愛撫の歌』の教育目的であり、それは「あなたの子どもを、外界・人類・自然との生き生きとした関係において、しかし特に、すべての事物の根源であり父である神との一致において、それ自身統一したものとして教育すること、神の子として教育し、教育して神の子とすること」であるとされ、さらに、この教育目的をより具体化した教育目標として、「身体・四肢・感官の強化と発達とからそれらの使用へ、事物への着目から知覚へ、注意から観察と静観へ、個々のものを知ることから共通のもの発見によってそれを結びつけることへ、非常に健康な身体・感官・四肢の生活から健康な精神生活へ高まりながら、思惟と結合した事物経験から純粹思惟へ。こうして、健康な力強い感情から深く考える情操へ、外的観照から内的把握へ、外部の並置から内面の比較と判断へ、外部の結合から内部の決定へ。すなわち、外部の理解から、内部の理解、悟性の発達と完成へ。現象の外的覚知から、その根拠と原因の内的諒解へ、生命を把握する理性の発達と完成へ」、つまり「子どもの身体・四肢・感官・自己感情・予感・精神の発達・陶冶」が掲げられている。

ところで、『母の歌と愛撫の歌』は7編の「母の歌と愛撫の歌」、50編の「遊戯の歌(Spiel-

Lieder)」、1編の「終の歌(Schluss-Lied)から成るが、それぞれの歌には装飾画(全56枚)と説明(欄外装飾画への説明、一部は2曲について一つの説明になっているため50の説明)、44曲の楽譜版(楽曲については一部詩と異なる曲がある)が添えられている。論者は、本章第2節において、各曲の詩と説明について考察を加えている。

第3章「『母の歌と愛撫の歌』楽譜版の楽曲分析」は、本論文の核心を成すものである。まず楽曲分析の観点が10点にわたり示されている。①拍子、②調性、③小節数、④全体の形式など曲の構成や性格、雰囲気など、⑤音域、⑥転調や拍子の変化の有無、⑦速度、⑧歌う、遊ぶ、聞くという三つの観点からの難易度、⑨時代背景を考慮した曲づくりの手法、⑩歌詞内容との関連性がそれである。次に、これらの観点に従って、楽曲一曲ずつについて、楽曲の分析と考察並びに歌詞の考察がなされている。

最後に、楽曲分析に基づく総合的考察がなされ、以下の10点が明らかにされている。

①フレーベルの詩に合わせて作曲されている。②19世紀前半の特徴ある作曲技法が用いられている。③音域は、母や乳幼児が歌唱する際、高音過ぎる部分がある。④歌唱において正しく歌う場合は、難易度が高い曲もあるため、聴かせる曲としての意図があると推測される。⑤乳幼児向けの明るいDurの曲調が多い。⑥音楽的形式を踏まえて作曲されている。⑦手遊び、指遊びなどの動作に合った拍子・速度の曲である。⑧歌詞内容に適する雰囲気を各曲がもっている。⑨乳幼児の感覚を刺激し、情操面によい影響をもたらすと考えられる、豊かな響きをもった芸術性の高い曲と考えられる。⑩フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』では、乳幼児の発達段階に合わせた遊びを通じた教育方法が示されているが、乳幼児の発達段階に合わせて、曲の長さや難易度を考慮した曲づくりがされている。さらには、母子が掲載曲を基に、初めの動作が変化していくことを予想し、自分なりの音楽を創作しながら遊びを広げられるような意図が曲の展開に感じられる。

第4章「諸版との比較」で、論者は、1844年にコールによる44曲の楽譜付きで出版された『母の歌と愛撫の歌』がその後フレーベルの弟子ランゲ(Wichard Lange, 1826-1884)によって1866年にフレーベルの詩と説明文、ウンガー(Friedrich Unger, 1811-1858)による絵、そしてコール作曲の楽譜を一体化して編纂・出版されたものの、フレーベル研究者プリーファー(Johannes Prüfer, 1882-1947)による編纂版(1911年、4. Aufl., 1927年)では楽譜が削除され、特にその第4版、1927年版が最も広く各国に流布したため、各国で『母の歌と愛撫の歌』が翻訳出版される際に、コールの楽譜が削除されるか、コールの原曲とは無関係に作曲ないし改編されることになった経緯を述べるとともに、コールの原曲版とドイツ、アメリカ及び日本で出版された8版に掲載された楽譜一曲一曲の比較研究を行い、コールの原曲版のもつ意義を探っている。

その比較研究の結果によれば、コール作曲の44曲がほぼ全曲掲載されているのは、アメリカのLord版(1888年)とPeabody版(1898年)、それに日本の熊谷周子版(1991年)である。なお、ドイツのSeidel版(1883年)はコール作曲の10曲、アメリカのGoldschmidt版(1904年)は26曲を掲載している。したがって、論者は、これら5版はコールの原曲を「問題な

し」と捉え、掲載したと見なしている。

一方、アメリカのBlow版(1895年)は、コールの曲が4曲掲載されているものの、大幅な変奏がなされ、原曲とはかけ離れたものになっているほか、一部を民謡などに変えて掲載し、フレーベルの歌詞も別の詩に差し替えているものが多い。このBlow版を基にした日本の津川圭一版(1957年)も、コールの曲が4曲掲載されているのみで、その他は別の曲に差し替えられている。それゆえ、論者は、この2版はコールの曲もフレーベルの歌詞も、国情や時代に合わず「問題あり」と捉え、掲載を避けたものと判断している。日本の『フレーベル全集』版(玉川大学出版部、1981年)は、歌詞はフレーベルのものを掲載しているが、楽曲はコールのとは全く別の曲となっているので、前5版と後2版との中間に位置づけている。最後に、論者は、この比較研究から、コール原曲版を「問題なし」として、そのまま掲載した版がより多く存在することが明らかになったとしている。

第5章「数字譜」では、論者は、『母の歌と愛撫の歌』の「愛撫と遊びの歌」に付された装飾画の中の2枚に、フレーベルによって描かれた数字譜「指ピアノ」と「指ピアノに合わせる歌」を取り上げ、コールの原譜と前章で比較されたうちの6版—他の2版には数字譜の掲載なし—について比較検討し、日本の津川圭一版(1957年)が最も忠実にフレーベルの数字譜を採譜し、フレーベルの意図を汲んで乳幼児が歌いやすく美しく楽しい簡単な曲にしていると結論している。さらに、論者は、コールや他の版の採譜を参考にして、自ら採譜を試み、フレーベルの数字譜は音楽的に基礎的で簡単なものであること、曲の長さも比較的短く、恐らく5歳児位を対象とし、歌を楽しみながら自然に、心で感じたままに表現することを幼児に求めていることが明らかになったと述べ、この数字譜を、現代日本の乳幼児の教育教材としても推奨できるとしている。

第6章「楽譜版の実践及びその効果についての調査」は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の今日的意義を探るとともに、現代日本における教育教材としての活用可能性を明らかにしようとする本論文の核心部分の一つである。

論者は、フレーベルの遊び歌が現代日本の乳幼児及びその母親に対する教育教材として果して活用できるか、教材としての効果があるかを検討するために、子育て支援センター(大学の研究機関として地域に開かれた施設)に通う0、1、2歳児とその母親に対して、2012年4月から2014年3月までの36か月間(毎週30分から60分程度)、一幼稚園の3、4、5歳児に対して、預かり保育時間(毎週30分から60分程度)に2012年9月から2013年2月までの6か月間、『母の歌と愛撫の歌』よりいくつかの遊び歌を選び、実践と調査を行った。幼稚園児(3、4、5歳児)に対する遊び歌実践の内容と結果については本章第1節で、母子(0、1、2歳児)に対する遊び歌実践の内容と結果については本章第2節で詳しく報告されている。

また、論者は、一保育園で遊び歌実践の効果を調査するため、71名の0～5歳児を対象に、2012年6月から2013年3月までの10か月間、『母の歌と愛撫の歌』より選んだ8曲の遊び歌を実践し、3回にわたって「メロディー模唱とリズム模唱」調査を、後半には2回「強

弱反復模奏感」の調査を行った。この調査結果については、本章第3節で4歳児14名に限って報告されている。さらに、論者は、この調査と比較対照するため、他の保育園(遊び歌未実践園)の園児にも同様の調査を行い、フレーベルの遊び歌のもたらす効果について、2園での調査結果を「手の発達」と「メロディー模唱などの音楽的発達」の2点から比較分析している。その結果は、本章第4節で、1歳児、2歳児、3歳児、4歳児、5歳児それぞれについて考察され、遊び歌実践を行った園の園児の発達にはほとんどの項目で有意な差が見られたという。したがって、論者は、被調査対象者の数が少ないとはいえ、フレーベルの遊び歌は乳幼児の手の発達やメロディー模唱などの音楽的発達において効果を及ぼすことが実証されたと結論づけている。

第7章「結論と今後の展望」において、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』が著されて170年以上を経過した現在、しかも、国情や乳幼児を取り巻く環境が著しく変化している中で、これまでのフレーベルの遊び歌実践で効果が認められた遊び歌10曲を選び、それらの曲のどこをどう改訂すれば、フレーベルの教育目的や方法、コールの作曲の意図、ウンゲルの絵に込められた思いを変えることなく、現代日本の乳幼児及びその母親に適した教育教材として用いることができるかを検討している。論者が提案する改訂の主なものは、フレーベルの遊び歌には付けられていない対象年齢の区分、現代日本の日常生活に合わせた歌詞の意識、曲の速度や強弱の変化、簡易な伴奏譜の付加、手作り玩具の使用や動作の変化による遊びの活性化、歌唱表現の変更、本の素材の改良、乳幼児向きの絵本の添付などである。

今後の展望としては、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』が日本に受容される過程を検証し、明治10年代の日本にはその楽譜版を受け入れる音楽的土壌がなかったことを明らかにするとともに、今後は彼の遊び歌を広く保育・教育現場に伝えていくことの必要性を挙げている。

「あとがき」において、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』が歌詞(フレーベルの詩)とメロディー(コールの楽曲)と絵(ウンゲルの装飾画)と母への説明から成る、他に類を見ない独創性をもった「遊び歌絵本」であることに着目し、先行研究の少ない音楽的視点から現代日本に見られない形態のオリジナル教育教材としての活用可能性、つまり現代的意義を探ることが本論文のテーマであったことを再確認している。そして、論者は、本論文によって明らかになった特に重要な点として、次の5点を挙げている。

①フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』初版にコールによって付けられた楽譜各曲の分析と考察—コールの楽曲はフレーベルの詩を重視し、詩に合わせて作曲したために、一部不自然な部分があること、母や保育者、乳幼児が歌唱するには高音過ぎる部分があること、しかし、聴かせる曲としては、問題はなく、音楽的形式を踏まえた楽曲であること、それぞれの歌詞に合わせた雰囲気重視した作曲がなされていることが明らかにされた。

②フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の受容過程においてドイツ、アメリカ及び日本で出版された8版の比較研究—コールの原曲版をそのまま掲載した版が少なからず存在するこ

とから、原曲版の受容が多くなされていることが明らかになった。一方、移調や伴奏譜の付加が見られる諸版も存在し、原曲版の課題も明らかにされた。

③装飾画に記載されたフレーベルの数字譜の考察—二つの数字譜には、その音域や難易度から乳幼児には簡単ですぐに模倣唱、模倣奏ができる歌を与えようとする意図が読み取れ、乳幼児の発達に合わせた、難易度の異なる多様な遊び方が提案されていることから、フレーベルが乳幼児の実態に即して現場で応用できる教材として提案していることが推測される。

④「遊び歌」の現代日本の乳幼児への実践とその教育的効果の測定—遊び歌の実践では、訳詩に一部歌いにくい部分や、歌詞の一部に国情や時代を考慮すべき点が認められたが、実践対象曲においては、現代日本の乳幼児にとっても楽しく遊べる教材であることが実証された。また、遊び歌の実践効果としては、一保育園の園児において、一対照園との比較から、手の発達と基礎的音楽能力において有意な差が見られた。

⑤現代の乳幼児教育教材としての可能性の検討と新たな提案—フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』は、歌を伴う遊びとして現代の乳幼児教育教材としての活用可能性をもつと言えるが、しかし、時代や国情に配慮し、歌詞の一部を改めることや意識して歌いやすくすること、ピアノ伴奏譜を付けること、安全で丈夫なカラー刷り素材に変更すること、母や保育者用の書と別冊の、乳幼児が手にして遊べる絵本を作成することなどが提案された。

最後に、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』は、単にその時を楽しむための歌や遊びだけではなく、乳幼児が人としてこの世界の中で、社会や自然とかかわりを持ちながら、これからの人生を歩んでいくために必要な生き方や人生観、人生哲学を含み、これこそが本書の最も重要な特質であり、本書のもつ意義であることを強調している。

今後の課題としては、フレーベルの遊び歌を「全く知らなかった」という保育者が多いことに鑑み、それが保育・教育現場でより多く乳幼児教育教材として普及するように努め、保育・教育現場でその教材としての意義が自覚され、活用されることを挙げている。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、フレーベルの晩年の著作『母の歌と愛撫の歌』の初版(1844年刊)にコールによって付けられた楽曲を詳細に分析・考察するとともに、フレーベルの乳幼児教育の思想と方法が集約され、「詩と絵と歌」が一体となっている「遊び歌絵本」が現代日本の乳幼児の教育教材として活用できるか、その可能性を探ろうとした意欲的で、独創的な研究である。

本論文の意義は、第一に、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に関する先行研究を隈なく渉猟し、これを大きく四つ、すなわち①その教育思想と内容の今日的意義に関する研究、②その教育方法学的研究、③その音楽教育学的研究、④その実践的研究に区分し、それぞれに考察を加えた上で、最も先行研究が少ないのが③と④であり、なかでも③の音楽教育学的研究が質量ともに希薄であるとし、自ら10点の楽曲分析の観点を定め、それに従って楽譜版

の一曲ずつについて、楽曲の詳しい分析と考察を行うとともに、歌詞にも考察を加えて、先行研究の欠落部分を補完しようとしたところにある。

従来必ずしも高く評価されていたとは言い難いコールの原曲ではあるが、楽曲分析の結果、それはフレーベルの詩を重視し、それに変更を加えることなく、メロディーを付けようとしていることに大きな特色と意味があるという。フレーベルの詩は『母の歌と愛撫の歌』を一貫して流れる彼の教育思想を礎として乳幼児教育の目的と方法を示しているの、その詩を変えないことが何より大切である。もっとも、歌詞に合わせることを重視したあまり、曲としてやや不自然な部分も見受けられるが、それにもかかわらず、コールは乳幼児向きの明るい Dur の曲調にし、乳幼児の感覚を刺激し情操面によい影響をもたらすとともに、豊かな響きをもった芸術性豊かな曲を作曲している。また、コールはフレーベルの意図を汲み取り、乳幼児の発達段階に合わせ、例えば、年齢が低い場合は、メロディーの音域も狭く、繰り返しが多く、簡単で、乳幼児が歌いやすく、覚えやすい曲づくりをする一方、年齢が高い場合には、音域を広げ、物語の展開に合わせて楽曲を変化させている。曲の長さについても、乳幼児が自ら歌う曲は短く、聴かせる意図をもつ曲や遊びに合わせて物語的な内容が進められていく曲は長くするなど、工夫を凝らしている。さらに、たしかに母や保育者、乳幼児が歌うには高音過ぎる部分もあるが、しかし、聴かせる曲としては、問題はなく、音楽的形式を踏まえた楽曲であり、それぞれの歌詞に合わせた雰囲気重視した作曲がなされていると論者はコールの原曲の価値を高く評価している。

本論文の意義は、第二に、論者が楽譜付き『母の歌と愛撫の歌』がその後なぜ楽譜を削除されて流布することになったかについて歴史的に考察し、併せて初版がドイツ、アメリカ、日本でどのように受容・変容されたのか、コールの原曲版を初め、ドイツ、アメリカ及び日本で出版された 8 版の楽譜一曲一曲を比較研究することによって改めて原曲版の意義を明らかにしているところにある。

論文の概要でも述べたように、コール作曲の 44 曲がほぼ全曲掲載されているのは、アメリカの Lord 版(1888 年)と Peabody 版(1898 年)と日本の熊谷周子版(1991 年)である。また、ドイツの Seidel 版(1883 年)はコール作曲の 10 曲、アメリカの Goldschmidt 版(1904 年)は 26 曲を掲載しており、論者は、これら 5 版はコールの原曲を「問題なし」と捉え、掲載したと見なしている。

一方、アメリカの Blow 版(1895 年)は、コールの曲が 4 曲掲載されているものの、大幅な変奏がなされ、原曲とはかけ離れたものになっているほか、一部を民謡などに変えて掲載し、フレーベルの歌詞も別の詩に差し替えているものが多い。この Blow 版を基にした日本の津川圭一版(1957 年)も、コールの曲が 4 曲掲載されているのみで、その他は別の曲に差し替えられている。それゆえ、論者は、この 2 版はコールの曲もフレーベルの歌詞も、国情や時代に合わず「問題あり」と捉え、掲載を避けたものと判断している。日本の『フレーベル全集』版(玉川大学出版部、1981 年)は、歌詞はフレーベルのものを掲載しているが、楽曲はコールのとは全く別の曲となっているので、前 5 版と後 2 版との中間に位置すると言

えよう。かくして、論者は、この比較研究から、コール原曲版を「問題なし」として、原曲版の受容がより多くなされている一方、移調や伴奏譜の付加が見られる諸版も存在し、原曲版の課題も明らかになったと結論している。

論者は、さらに、『母の歌と愛撫の歌』にとって大きな意味をもっているにもかかわらず、研究がほとんど見られない、『母の歌と愛撫の歌』の装飾画の中の2枚にフレーベルにより描かれた数字譜「指ピアノ」と「指ピアノに合わせる歌」に着目し、諸版の採譜と比較するとともに、論者自身も新たに採譜し、乳幼児の実態に即した、簡単ですぐに模倣唱、模倣奏ができる歌を提供しようとするフレーベルの意図を浮き彫りにしているところに、本論文の第三の意義が認められる。

論者によれば、数字譜は、まず乳幼児に「真似弾き」させたい内容では簡単で、音域も5度程度であること、リズムも4分音符中心で、2分音符、8分音符といった音楽的には非常に基礎的で簡単なものであること、曲の長さも比較的短く、「真似弾き」という観点からは、5歳児くらいを対象としていること、歌を楽しみながら、自然に、心で感じたままに表現することを乳幼児に求めていること、独唱においては、乳幼児が誰でも自信をもって歌えるような簡単なメロディーとし、合唱においては、簡単ではあるが、曲として面白味もあり、音楽的にも少しハーモニックなリズムカルなものとして、乳幼児がそのどちらをも楽しめるようにしたことを指摘している。

論者の採譜した「指ピアノ」の訳詩では、乳幼児が歌いやすいように意識し、音符の数に言葉の数を合わせるように工夫し、「指ピアノに合わせる歌」は右手で弾く場合、指番号の模倣弾きが鍵盤楽器で簡単にできることから、「鍵盤楽器の弾き遊び」と「歌遊び」(奏法上難易度の高い部分)であると考えられる。

論者の採譜では、「鍵盤楽器の弾き遊び」がしやすいCdurとし、乳幼児が読譜できなくとも、5指に番号を付けることによって、母の「弾き歌い」が模倣でき、また、身近に楽器がない場合でも、指を使って遊ぶこともできるし、ピアノなどを弾いて聴かせれば、乳幼児に音楽的に豊かな感性が生まれ、何より乳幼児の遊びへの意欲を増すこともできよう。

本論文の第四の意義は、日本の先行研究では熊谷周子の1例しかない実践研究—熊谷は1989年に『母の歌と愛撫の歌』の「愛撫と遊戯の歌」より「足をばたばた」「ぱったりこ坊やがころぶ」「塔の風見」の3曲を、1歳6か月までの乳幼児をもつ母子12組に対して実践している一を、論者は、それよりも年齢の幅を広げ、対象人数、実践期間、実践する曲数も増やして行い、その実践結果に基づき、楽譜付き『母の歌と愛撫の歌』の今日的意義を捉えたところにある。

論者は、フレーベルの遊び歌が現代日本の乳幼児及びその母親に対する教育教材として果して活用できるか、教材としての効果があるかを検討するために、論文の概要でも触れたように、子育て支援センターに通う0、1、2歳児とその母親に対して36か月間、一幼稚園の3、4、5歳児に対して6か月間、『母の歌と愛撫の歌』よりいくつかの遊び歌を選び、実践と調査を行った。また、論者は、一保育園で遊び歌実践の効果を調査するため、71名の0

～5歳児を対象に10か月間、『母の歌と愛撫の歌』より選んだ8曲の遊び歌を実践し、3回にわたって「メロディー模唱とリズム模唱」調査を、後半には2回「強弱反復模奏感」の調査を行っている。この調査結果によれば、遊び歌実践を行った園の園児の発達にはほとんどの項目で有意な差が見られたという。したがって、論者は、被調査対象者の数が少ないとはいえ、フレーベルの遊び歌は乳幼児の手の発達やメロディー模唱などの音楽的発達において効果を及ぼすことが実証されたと結論づけている。

『母の歌と愛撫の歌』が著されてから170年を経た現在では、この書を我が国において教材として使用しようとすれば、訳詩に一部歌にくい部分や歌詞の一部に国情や乳幼児を取り巻く環境の変化などに合わない部分が見られ、最低限の歌詞の改訂が必要とされることは否めない。また、『母の歌と愛撫の歌』には明確な対象年齢の記載はない。そこで、論者は、全58曲を対象年齢別に区分するとともに、「母の歌と愛撫の歌」で唯一楽曲が付けられた「初めの歌」及び「愛撫と遊びの歌」の中から実践に用いた「あんよでタントントン」「チック タック」「ひなどりさんおいで」「小鳩さんおいで」「お菓子づくり」「鳥の巣」「親指でひとつ」「指ピアノ」の8曲と「指ピアノに合わせる歌」の合計10曲について、現代日本の乳幼児にとっても楽しく遊べる教材であることを実証するとともに、現代日本における乳幼児教育教材として活用するに当たっての具体的な提案を行っている。例えば、歌詞が時代や国情から、現代の乳幼児の生活から遠ざかっている場合には、歌詞を意識して歌いやすくしたり、曲の速度や強弱に変化をもたせたり、手作り玩具を使用したり、簡易な伴奏譜、楽譜に曲想記号を付けたり、教材として使用する際にCDやDVDを使用したり、乳幼児が手にして遊べる安全で丈夫なカラー刷りの絵本を作成したりするという提案である。『母の歌と愛撫の歌』を現代日本に見られない形態のオリジナルな乳幼児教育教材として使用するのに有効な提案であると評価できる。

最後に、論者は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』は詩と絵と歌が三位一体となった遊び歌絵本であり、乳幼児の特性を生かした教育方法により、乳幼児の四肢や感官の発達を促し、その内面を引き出し育てることができる、現代の母や保育者にとってもかけがえのない教育教材であることを強調している。また、フレーベルの「遊び歌」は、リズムに簡単な身体の動き、言葉と見立て遊びや他者との触れ合い遊びといった側面を付け加えた遊びであり、そのため、必ずしも楽器がなくても、広いスペースがなくても、一人でも集団でも誰もがどこでも楽しめる側面をもち、乳幼児期の教育に必要な、言葉とリズムと音楽と身体の動作と社会性や人のかかわり等、すべてを含み込んだ教材であり、乳幼児が人としてこの世界の中で、社会や自然とかかわりを持ちながら、これからの人生を歩んでいくために必要な生き方や人生観、人生哲学を無意識のうちに身に付け得る貴重な教材であることも指摘している。フレーベルの遊び歌を「全く知らない」「全く知らなかった」という保育者が多い今日、それが保育・教育現場で乳幼児教育教材としての意義が認められ、普及するように尽力したいというのが、論者のたつての願いである。

本論文は、以上のように、高く評価すべき独創性を豊かに備えているが、論者自身が今後

の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により指摘された問題点をいくつか挙げておくことにしよう。

第一に、論者がコール作曲の全楽譜について、楽曲の分析並びに歌詞と楽曲の考察を行った意義は認めるものの、フレーベル自身が『母の歌と愛撫の歌』に私の「教育法の最も重要なものを横たえた」と述べていることから、歌詞の考察において歌詞に込められた教育目的や教育目標及びそれと結びついた教育方法にもう少し詳しく、突っ込んだ論及があつてしかるべきではなかったかという指摘がなされた。

第二に、論者が『母の歌と愛撫の歌』の音楽教育学的研究と銘打って、楽曲の分析を行うに際して、コールが作曲した時代の音楽及び音楽教育の歴史的背景についてより詳細に記述すればよかつたのではないかと指摘された。今後の研究において考察の幅を拡げるための課題となろう。

第三に、論者がフレーベルの遊び歌実践を行い、乳幼児の手の発達やメロディー模唱などの音楽的発達において効果を及ぼすことを実証したのは評価できるが、手の発達や音楽的発達に効果があつたというだけに止めないで、「古典的」なフレーベルの遊び歌自体の実践的效果を問う視点をもつべきではなかったかとも指摘された。

第四に、論者の引用文献の一部について、原典批判をより厳密に行う必要性が指摘された。

以上、審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。たしかに、本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかであるが、しかし、これらは、今後の研究の進展によって早晚解決されるであろうし、課程博士論文としての価値を損なうものではない。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文と認める。